# 僕たちの約束

翔香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕たちの約束

【Ｎコード】
Ｎ１１３５ＢＡ

【作者名】
翔香

【あらすじ】
智、疾登、花輪は、幼いころに何者かによって両親を殺された。
智は、疾登と花輪に施設で「大人になったら犯人見つけてぶっ殺そうな」
という約束をした。
それから１５年たった今、犯人を捜すが、犯人の似顔絵しか手掛か

りがない

ので何年たっても犯人が見つからなかった。

疾登に襲いかかる悲劇。

花輪の不審なメール。

衝撃の結末が彼らを待っていた。

# 第1話　花輪の敵

僕は野々神智。今、妹の花輪と、弟の疾登と一緒に昔のアルバムを見ていた。
かといって写真はそんなになかった。それには深いわけがあった。

「お兄。またいじめられた。」

また花輪が泥だらけになって泣きながら帰ってきた。

「またあいつにいじめられたのか？」

「うん。」

「まだやってるのか、あれだけ怒ったのに」

「あいつ」とは、花輪をほぼ毎日いじめる「水川彩野」。
つい2日前に「また花輪をいじめたらどうなるか分かってるか？」と疾登と一緒に脅してきたんだがまだ反省してなかったのか。

「よし、一発殴ってやろうかなぁ。」
すると、花輪が急に「それはやめてあげて！」と言った。
花輪は優しいから人を殴るということは許せないらしい。たとえ自分をいじめた人間だったとしても。

「分かった。でも、もう一回怒ってくるからな。」

「ありがとう。お兄。」

花輪がにっこり笑った。いつもこの笑顔に癒される。

「よし、水川彩野の家に行くぞ！」

花輪は大きく頷いた。智はテレビゲームに夢中になっている疾登に言った。

「疾登も行くぞ。」

疾登は画面に目を向けながら「ちょっと待って」と言った。

智は冷たく「じゃあ置いていくぞ」といった。すると、疾登は「ごめん、ごめん。すぐ行く。」

と言ってゲームをセーブしてから家を出た。

ピンポーン

水川彩野のインターホンを鳴らした。

返事がない。もう一度鳴らすと「はい」という声が聞こえた。しばらくするとドアが開いた。

すると、智の顔を見て鬱陶しそうな顔をして言った。

「なんですか？また彩野がいじめたと言うのです？それは間違いですわ。

今日は彩野ったらかわいそうに泣きながら帰ってきたのよ！」

智にはその言葉が理解できなかった。なぜ花輪がいじめられたのに水川彩野が泣くんだ？

「いや、いじめられたのはうちの妹で」

「ちがうわ！彩野はあなたの妹に叩かれたっていうのよ！」

そんなはずはない。花輪がそんなことするはずがない。

明らかに、あの母親か彩野が嘘をついてるに違いない。しかし、一応、花輪に確認を取った。

「花輪。叩いたのか？本当のことを言ってくれ。」

「叩いてないよ。本当だよ。」

良かった。智はホッとした。すると、急にこの会話を聞いていたのかついに母親の怒りが爆発した。

「もういいわ！帰ってちょうだい！もう、あなたたちの顔を見るとイライラするわ！本当不愉快だわ！」

そう言い放った母親は乱暴にドアを閉めた。

いくらなんでもあれは言いすぎだろと心の中で愚痴を言った。

「花輪。もう、あいつらのことは相手にするな。」

「分かった。じゃあこれからお兄と疾兄で一緒に学校行っていい？

「いいよ。な、疾登。」

「うん。」

「やったー！」

花輪はにっこり笑った。

「じゃあ帰ろう。」

三人は仲良く手をつないで帰った。

## 第2話　突然の出来事

「お兄！早く学校行こう！」

「うん。疾登、早くしろよー」

「ちょっと待って」

いつも疾登は朝が弱いので、支度が遅い。

「よし！準備できたぞ。智兄、花輪行くぞー！」

「お前が待たせたんだろ。」

智はため息をついた。花輪も「そうだよ」とほっぺを膨らませる。

「ごめん、ごめん。そうだった。」

三人はお父さんと、お母さんに「行ってきます」と言って家を出た。この日から今まで平凡だった毎日が何者かによって不幸に変わることは知る由もなかった。

今日はたまたま三人の帰る時間が一緒だったので一緒に家まで帰った。

学校での出来事を話しながら帰っているとあっという間に家についた。

家の近くに近所の人がたくさん集まっていた。

人ごみをかき分けながら家の前に行くと、パトカーや報道陣がたく

さんいた。
三人は訳が分からず、その場に立ち行くしていると、
「この家の子かな？」
と刑事さんらしい人が話しかけてきた。智は「そうです」と言った。
「ちょっと大事な話があるんだけど、お兄ちゃんだけ来てくれるかな？」
と真剣な顔で言われた。智は分かりましたと言うと疾登と花輪に「ちょっと待ってろ」と言った。
どうしたんだろう。何かあったのか？
智は刑事さんに人目のつかないところに連れて行かれた。

「ちょっとまだ小さい君には混乱してしまうかもしれないが・・・」
「どうしたんですか？」
刑事さんは少し間を置いて言った。
「実は、君のお父さんとお母さんが何者かによって殺されたんだ。」
その言葉の意味が分からなかったがしばらくして分かった。だが、信じられなかった。
「そんな・・・嘘ですよね？刑事さん！嘘って・・・言ってくださいよ・・・」

智はその場に崩れ落ちた。それと同時に大粒の涙が零れ落ちた。

「君のお父さんとお母さんを殺した犯人はまだ見つかってない。絶対に見つけてやるからな。」

刑事さんは優しく話しかけてくれたが智はお父さんとお母さんの顔が頭から離れなくなっていた。

お父さんととお母さんを返せ！心の中で何度も叫んだ。何度叫んでも戻ってくるはずない。

そう考えるとまた涙が溢れ出てきた。

「君。名前は何て言うんだ？」

「・・・野々神・・・智です。」

智は、あなたは？と力なく聞いた。

「俺は佐名木浩輔だ。それで、智君。智君の弟と妹に何て言おうか。まだ小さいしお父さんとお母さんが殺されたなんて言うのは残酷すぎる。」

智は俯いたまま何も言わなかった。

「・・・とりあえず今日は病気で倒れたと言っておこう。

それからタイミングを見て本当のことを話すんだ。いいね？」

本当に病気で倒れたなどと嘘をついてもいいのだろうかと迷ったが、

突然、疾登と花輪が殺されたなど
言われると混乱するだろうと思いその考えを了承した。

「頼んだぞ。智君。」

そう言って佐名木さんはどこかへ行ってしまった。
お父さんとお母さんを殺した人間が憎かった。智は思いっきり地面を睨みつけてから
疾登と花輪のいるところに戻った。

## 第3話　真実を告げるとき

「あ、お兄！どこ行ってたの？」

二人は仲良く座って待っていた。

「ちょっとな。」

力なくそう言うと花輪がどうしたの？と顔を覗き込んできた。

智はあれを言うタイミングはここしかないと思い、二人の目の高さを同じにして言った。

「お父さんとお母さんが・・・病気で倒れたんだ。」

「え・・・」

「父ちゃんと母ちゃん・・・無事なんだよな？」

その言葉を聞いてまた涙がにじみ出てきた。

「智兄！何とか言えよ！」

「・・・ああ。無事だ。」

「そっか。ごめん。急に怒鳴って。」

智はいいよと優しく言った。すると花輪が笑顔で言った。

「じゃあ今からお父さんとお母さんの病院に行こうよ！」

「それは・・・だめだ。」

花輪はなんでというように首をかしげる。

「そ、それは・・・あれだよどこの病院にいるのか分からないんだ。」

そう言うと、花輪は俯いてしまった。

「それで今日は家に入れるの？智兄。」

「ああ、今日は無理っぽいからおばあちゃんの家に泊めてもらおう。」

幸いなことにおばあちゃん家が近かったのでその日はおばあちゃんの家で一夜を過ごした。

「お兄！疾兄！起きて！」

智はうっすら目を開けた。ここはどこだ？あ、そうだ。おばあちゃんの家に泊まってるんだった。

起きてしばらくたってから思い出した。

「ああ、おはよう。」

もう8時を回っていた。疾登はもうちょっと寝かせろと言って起きようとしない。

「ねえ。お兄、疾兄。一緒に遊ぼ！」

今日は土曜日なので学校は休みだ。いいよと言おうとした時、部屋におばあちゃんが入ってきた。

「おはよう。さあみんな朝ご飯食べよ。お腹すいただろう。」

おばあちゃんは優しく言ってにこっと笑ったが、自分の子が殺されたのが辛かったのだろう。
少し無理して笑っていた。

「うん！お腹すいた！お兄、疾兄、朝ご飯食べよ！」

智はうんと言って頷くと疾登を無理やり起こした。

「いただきまーす。」

そう言って朝ご飯にかぶりついた。花輪は遊ぶことを忘れたようだ。おばあちゃんの作った朝ご飯はとてもおいしかった。朝ご飯が終わって、僕は二人を部屋に呼んだ。
あれを話すためだ。

「お兄、どうしたの？難しい顔して。」

花輪が心配そうな顔をして言った。疾登も花輪と同じ表情で智を見ている。

「・・・昨日さ、お父さんとお母さんが倒れたって言ったよな。」

「そうだけど、それがどうしたんだよ。」

疾登が聞いてきた。智は申し訳なさそうな顔をして言った。

「・・・実は、あの話・・・全部嘘だったんだ。ごめん・・・」

溢れ出そうな涙を堪えて言った。

「・・・じゃあ本当は父ちゃんと母ちゃんは・・・」

僕は堪えきれず涙を流しながら言った。

「お父さんとお母さんは・・・殺されたんだ。」

「そんな・・・嘘だろ・・・」

疾登はその場に崩れ落ちた。花輪はまだ理解ができてないのか、突っ立っている。

そんな花輪に智は優しく話しかけた。

「花輪。もう、お父さんとお母さんはいないんだ。」

語尾が震えたのが分かった。やっと状況が分かったのか花輪は急に泣き出した。

「そんなのいやだよ！お兄！お父さんとお母さんに会いたいよ！」

智は首を左右に振った。目から涙が零れ落ちた。
足音が聞こえたが部屋には入ってこなかった。おばあちゃんの足音だった。気を使ってそっとしておいてくれたのだろう。三人はしばらく泣き続けた。

## 第４話　疾登の悲劇（前書き）

少し、次話を投稿するのに時間がかかってしまいました。
多分、これからもこれくらい（いや、これ以上の）日数がかかってしまうかもしれません（涙）
そこら辺はどうかお許しを・・・

## 第４話　疾登の悲劇

みんなが少し落ち着いた後に自宅にいる佐名木さんに真実を告げたと言った。

「そうか。大変だったろ。」

そう言って智の頭を優しくなでた。その動作はお父さんとお母さんもやってくれた。それを思い出したらまた涙が出てきた。

「泣くなよ。お兄ちゃんだろ。」

智は小さく頷いて涙を拭った。

「よし、それでこそお兄ちゃんだ。あ、それと明後日から施設に行くことになったんだ。」

「施設・・・ですか？」

「そうだ。必要最低限の物だけ持っていくんだぞ。」

「分かりました。」

智は急いでおばあちゃんの家に戻った。

「花輪、疾登。」

二人は同時に智の方を向いた。花輪はさっき泣いていた顔とは正反対でニコッと笑って興味深そうに聞いてきた。多分無理をしている

のだろう。みんなを元気にさせるために。疾登は、俯いたままだった。

「明後日から施設に行くことになった。」

花輪が首を傾ける。

「お父さんやお母さんがいない人が行くところだよ。」

すると、急に花輪の顔から笑顔が消えた。

「ごめん。言い方が悪かったな。」

「いいよ。もう、どうにもならないんでしょ。」

そう言って俯いてしまった。

「ごめんな。花輪。」

花輪は小さく首を振った。

「・・・わかった。じゃあ、もう準備するか。ほら疾登。何かしゃべれよ。」

疾登はまだ俯いていた。そこで、やっと疾登の異変に気が付いた。

「大丈夫か？顔色悪いぞ。」

疾登の息が少し荒い。

すると、急に疾登が倒れた。

「お、おい！疾登！しっかりしろ！」

花輪も慌てて疾登のそばに来て声をかけた。智は急いで救急車を呼んだ。

智と花輪は病室で疾登が目を覚ますのを待っていた。

突然、疾登がうなりはじめた。とても苦しそうだ。しばらくして疾登は目を開けた。

「疾登。大丈夫か？ずいぶん苦しそうだったけど。」

すると、疾登は智の腕を掴んで言った。

「智兄！俺、さっきの夢で見たんだ！」

智は疾登が興奮して智の腕を掴んだ。

「と、とりあえず落ち着け。疾登」

疾登は、大きな深呼吸をした。落ち着いたところで「何を見たんだ？」と聞いた。

「俺、父ちゃんと母ちゃんが殺されている夢を見てたんだ。そうしたら、犯人の顔が見えたんだ。」

夢なんだからそれが本当の犯人とは限らない。それに、実在するかもわからない。しかし、一応、犯人の特徴だけ聞いた。

「特徴は、ちょっと太ってて背が高くて、髪は坊主でマスクをかぶってた。とても
悪そうな顔つきをしてんだ。」

意外とはっきりとした特徴だった。もうちょっと聞きたいことがあったが、疾登はまだ熱があるので明日詳しく聞くことにした。

「疾登。もう今日は休んだ方がいい。続きは明日聞くよ。」

「分かった。」

そういって疾登はベットに横たわった。智と花輪は静かに病室を出た。

翌日。智と花輪は疾登がいる病院に向かった。病室の扉を開けて中に入った。疾登は窓の外をじっと見ていた。

「疾登。おはよう。」

智は落ち着いた声で言った。

「ああ。おはよう。来てくれたんだな。」

そういって疾登はにっこり微笑んだ。

「おう。それで昨日の話の続きを聞きたいんだけど・・・」

そう言うと疾登は真剣な顔になって言った。

「分かった。ゲホッ」

疾登が急に吐血した。智はびっくりして疾登の背中をさすりながら言った。

「大丈夫か！今、先生呼ぶから！花輪！そこのボタン押してくれ！」

花輪が急いで緊急時のボタンを押そうとした時、疾登が急に笑い出した。智と花輪は、訳が分からずただ口を開けたまま突っ立っていた。

「まんまとひっかかったね。二人とも。」

「どうゆうことだよ？」

智は首をかしげながら言った。

「ドッキリだよ！」

その言葉でやっと意味が分かった。疾登は智と花輪をだましたということが。

「お、お前！よくもだましたな！」

智は疾登を脅すように言った。花輪も続けて言った。

「そうだよ疾兄！びっくりしたじゃん！」

「ごめん、ごめん。でも、俺の演技上手かっただろ？」

全然反省してない疾登を見て怒りを通り越して呆れた。

「疾登。それどこに売ってんだよ。」

智は疾登に聞いた。少し興味がわいたからだ。疾登は隣のベットでゲームをしている男の子に指を指して言った。

「亮太君がくれたんだよ。昨日友達になった。」

智は亮太君を見た。すると、亮太君は微笑んで頭を下げた。
疾登は満面の笑みを浮かべて「大成功だな」と嬉しそうに言った。
亮太君も笑って「そうだな。」と言った。

「そうだ！疾登。今日、熱は測ったか？」

智は思い出したように言った。疾登は「測ったよ。熱なかった。」と言った。智は安心して言った。

「そうか。良かった。じゃあ、今日退院できるな。」

疾登は笑って「良かった」と言った。反対に、亮太君はさびしそうな顔をしていた。それに気が付いた
疾走は優しくこう言った。

「連絡先を交換しよう。そうしたらお互いの声が聴けるだろ。」

それを聞いた亮太君は早速自分の携帯番号を紙に書いて疾登に渡した。疾走も自分の携帯番号を紙に書いて渡した。そして、疾登は「退院したら一緒に遊ぼうな。」と言った。亮太君は「うん！」と頷

いた。しかし、その後、亮太君が一瞬悲しい顔をしたように見えたのだが、気のせいだろうか。

「よし、じゃあ帰る準備しろ。」

智はそう言うと疾登は準備に取り掛かった。亮太君も手伝ってくれた。

準備が終わり、疾登は「絶対、退院したら遊ぼうな。また連絡するから。」と亮太君に優しく言った。智と花輪は亮太君に頭を下げて病室を出て行った。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1135ba/

僕たちの約束

2012年1月6日17時55分発行